

報道関係各位

2021.10.15

あひらがわ
勇払原野の安平川下流域に整備予定

かどうない
河道内調整地(遊水地)で、今年も7種の希少鳥類を確認

公益財団法人日本野鳥の会は、今年の繁殖期（4～8月）にウトナイ湖サンクチュアリ（北海道苫小牧市）が新しい手法も取り入れながら実施した^{ゆうふつ}勇払原野での鳥類調査で、国内レッドリストに挙げられた絶滅危惧ⅠB類を3種、同Ⅱ類を2種、準絶滅危惧を2種、計7種の絶滅のおそれのある鳥類の生息を確認しました（別紙詳細資料1）。なかでも準絶滅危惧のマキノセンニュウは、^{あひらがわ}安平川（下流部右岸）湿原では、出現回数が最も多くなり、ウトナイ湖と比較しても確認頻度（※1）が高いことが分かりました。

現在、当会は勇払原野の苫小牧東部開発地域に整備される^{かどうない}河道内調整地(遊水地)のラムサール条約湿地登録をめざして保全活動を行っており、その一環として、希少鳥類の調査を毎年実施し、結果の一部を公表しています（別紙詳細資料2）。

なお、調査結果の公表によって希少鳥類の繁殖に悪影響が及ばないように、繁殖を終えたこの時期の発表といたしました。また、希少鳥類の生息攪乱を防ぐために、詳しい確認位置等の公表は控えさせていただきますのでご了承ください。

※1 その鳥を観察した回数を、調査回数で割って求めた頻度

■今年の新たな調査手法について

●タンチョウ ドローンで採食地を特定

これまでは目視により、約1Km先にいる個体の行動を確認していましたが、タンチョウは、人が容易に近づくことのできないヨシ原で繁殖するため、巣自体の確認は困難でした。そこで今年には新たな手法として、ドローンを用いて営巣地を特定する調査を実施したところ、昨シーズンに続き、1つがいが断続的に採食場として利用していることを確認しました。今回は営巣の確認には至りませんでした。今後はさまざまな調査手法を検討することで生息状況を把握し、生息環境の保全に努めていきます。



タンチョウ 写真/日本野鳥の会

●シマクイナ 音声調査により生息を確認

絶滅危惧 IB 類のシマクイナの調査は、これまでウトナイ湖サンクチュアリのボランティアの協力を得ながら毎年 2 回、夜間に実施していましたが、今年は、より効果的な音声マイクおよびマイクロフォンアレイ(後述)を用いた方法で、計 25 日間の調査を行ないました。調査の結果 1 羽の声を確認し、また、6 月上旬にはすでに勇払原野に渡来していることがわかりました。 なお、当会は繁殖期における生息を 2012 年以降毎年確認していますが、勇払原野と青森県弘沼では 2018 年に国内で初めて繁殖が確認され、さらに勇払原野では幼鳥 6 羽が目視確認されました(Senzaki et al. 2021)。



シマクイナ 写真/宮 彰男

1、音声マイク調査_5 月下旬-6 月上旬実施

シマクイナは湿性草原で繁殖する夜行性の小型のクイナで、目視による確認が非常に難しい種です。そのため夜間に本種のさえずりをスピーカーで流し、その音源への反応回数や推定位置を記録する「プレイバック調査」を、毎回実施しています。シマクイナの反応を直接現地で聞き取る調査人員確保の困難さから、例年は 7 月下旬から 8 月上旬の最もさえずりがさかんな時期に、2 日間、1 回 2 時間の調査が限界でした。今回は音声マイクを用いることで 5 月下旬から 6 月上旬にかけて例年の 11 倍にあたる 22 日間実施し、6 月 9 日にシマクイナの鳴き声を記録しました。今回の調査で初めて、6 月上旬にはすでに勇払原野に渡ってきていることが明らかになりました。今後は、この手法を用いてシマクイナの生息状況についてさらに明らかにしていきたいと考えています。

2、マイクロフォンアレイとロボット聴覚を用いた音声調査_8 月中旬実施

当会は、大阪大学大学院基礎工学研究科の松林志保特任准教授(常勤)が、勇払原野において実施したマイクロフォンアレイ(録音装置)を用いた調査に同行、協力しました。上述の音声マイク調査と同様に、「プレイバック調査」を実施し、シマクイナの反応をマイクロフォンアレイ3台で観測することを試みました。今回の調査は、2 日間と限られた日数で実施したためシマクイナの鳴き声は確認できませんでしたが、本観測手法を用いることによって、シマクイナが広大な湿地をどのように利用しているかの解明など、生息地の管理や保全に役立つ生態情報の収集を期待しています。



勇払原野にてマイクロフォンアレイを設置

<マイクロフォンアレイとロボット聴覚について>

マイクロフォンアレイとは複数のマイクロフォンで構成される録音機材であり、それぞれのマイクロフォンで観測される音の違い(時間差、位相差)を処理・解析することで、音の到来方向を推定する機能を持ちます。軍事技術から資源探査まで幅広い分野で応用されていますが、身近なところでは、スマートスピーカーや Web 会議用のマイク等にも同種の技術が使われています。今回使用したマイクロフォンアレイ「TAMAGO」(株)システムインフロンティア社製)は、機材の円周上に 8 個のマイクを配置しています。

松林特任准教授が所属する研究グループでは、マイクロフォンアレイで収録した音声データをロボット聴覚オープンソースソフトウェア HARK (Honda Research Institute Japan Audition for Robots with Kyoto University) を用いることで音源定位(音の到来方向を推定)・音源分離(音声を抽出)を行う HARKBird という録音分析、解析システムを開発し、夜行性鳥類を含めさまざまな鳥類の位置情報付き鳴き声観測に取り組んでいます(松林他 2018, Matsubayashi et al 2021)。

<引用文献>

松林志保, 斎藤史之, 林晃一郎, 鈴木麗壘, 有田隆也, 中臺一博, 奥乃博,

(2018) ロボットが聴く夜の鳥, -人工知能学会賞-52(4) pp.15-20.

MATSUBAYASHI S, SAITO F, Suzuki R, NAKADAI K, OKUNO H.G, (2021) Observing Nocturnal Birds Using Localization Techniques, 2021 IEEE/SICE International Symposium on System Integration, pp. 1-6,

(DOI: <https://doi.org/10.1109/IEEECONF49454.2021.9382665>)

●河道内遊水地の重要性 ラムサール条約湿地登録をめざして

今回の調査で確認された7種は、ほとんどが湿原や草原に生息し、また、全国でも限られた地域にしか生息しない鳥類です。全国的にみても希少な鳥類が生息する湿原や草原といった自然環境が、苫小牧市内に残されていることが、あらためて明らかになりました。また、今回新たに導入した手法を用いれば、希少鳥類の生息状況をより正確に把握することができ、生息地である勇払原野の重要性を評価できる可能性があることもわかりました。

当会は、これらの湿原性鳥類にとって重要な生息地である河道内調整地(遊水地。安平川下流部に整備予定)のラムサール条約湿地登録を、2016年から提案しています。また、河道内調整地に造成される周囲堤の工事は、約10年間の計画で行なわれ、今後本格化します。工事期間中は希少鳥類の生息地に影響が及ぶことなく、河道内調整地の目的である自然環境の保全と治水がともに達成されるよう、当会は今後も関係機関と連携し、保全活動を進めてまいります。

●11月3日(水・祝)にオンラインにてシンポジウム開催

当会がウトナイ湖サンクチュアリを開設してから今年で40周年、ウトナイ湖のラムサール条約湿地登録から30周年を迎えました。これを記念し、これまでの調査を含む保全活動やワイズユースの実例を広く伝え、今後の勇払原野(河道内調整地)のラムサール条約湿地登録に向けた活動について、多くの方々に理解を深めてもらうため、下記の要領にてオンラインでシンポジウムを開催します。

*11月3日(水・祝) 13:30-16:30 (予定) 要事前申込み

*くわしくは、「広報とまこまい」10月号またはウトナイ湖サンクチュアリのホームページをご覧ください。

<引用文献>

KITAZAWA M, SENZAKI M, MATSUMIYA H, HARA S, MIZUMURA H (2020) Drastic decline in the endemic brown shrike subspecies *Lanius cristatus superciliosus* in Japan. *Bird Conservation International, First View*, pp. 1 - 9 (DOI: <https://doi.org/10.1017/S0959270920000556>)

SENZAKI M, KITAZAWA M, SADAKUNI T, TAKAHASHI M (2021) Breeding evidence of the vulnerable Swinhoe's Rail in Japan. *The Wilson Journal of Ornithology* 132(3), 711-717, (DOI: <https://doi.org/10.1676/19-45>)

■「日本野鳥の会」について

「野鳥も人も地球のなかま」を合言葉に、野鳥や自然の素晴らしさを伝えながら、自然と人間とが共存する豊かな社会の実現をめざして活動をしている自然保護団体です。

独自の野鳥保護区を設置し、シマフクロウやタンチョウなどの絶滅危惧種の保護活動を行なうほか、野鳥や自然の楽しみ方や知識を普及するため、イベントの企画や出版物の発行などを行なっています。会員・サポーター数は約5万人。野鳥や自然を大切に思う方ならどなたでも会員になれます。

<組織概要>

組織名 : 公益財団法人 日本野鳥の会

代表者 : 理事長 遠藤孝一

所在地 : 〒141-0031 東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

創立 : 1934(昭和9)年3月11日 * 創立87年の日本最古にして最大の自然保護団体

URL : <https://www.wbsj.org/>

■報道関係者様 問い合わせ先: (画像の提供も下記にお問い合わせください)

公益財団法人日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ

担当: 中村 聡 E-mail: nakamura@wbsj.org

善浪(ぜんなみ) めぐみ E-mail: zennami-m@wbsj.org

TEL: 0144-58-2505/080-2872-2709(業務用携帯)

今回の調査で確認された希少鳥類

絶滅危惧 I B 類

●シマクイナ(ツル目クイナ科 全長13cm)

- ・主に湿地や水田を利用し、繁殖期にはシベリア南東部やモンゴルで確認され、国内では勇払原野や青森県仏沼など、北海道と青森県の限られた場所で少数の観察記録がある。冬期には青森以南でも少数が確認されている。越冬地となるヨシ原が全国的に減少していることから、絶滅危惧種に指定されている。
- ・2020年に「種の保存法」に基づいて「国内希少野生動植物種」に指定され、保護対象種となった。
- ・アジア周辺には1万羽未満しか生息しないと考えられているが、詳しい生息状況はわかっていない。
- ・勇払原野では、2012年から毎年繁殖期に確認しており、今回の調査では1羽の鳴き声を録音できた。



●アカモズ(スズメ目モズ科 全長20cm)

- ・夏鳥として九州～北海道の原野、灌木のある草原、河川敷等で繁殖し、東南アジア等で越冬する。
- ・近年急激に個体数が減少したことで、2006年の環境省第3次レッドリストで、準絶滅危惧から絶滅危惧 I B類に2つランクが上がった。
- ・近縁種のモズより自然度の高い場所に生育するため、生息地や個体数が少なく、2021年に環境省が定める「種の保存法」の指定種となった。
- ・ウトナイ湖周辺では2004年以降確認できなくなったが、勇払原野では毎年2～4つがいを確認し、2年続けて幼鳥の確認ができた。
- ・近年生息数の減少が著しいアカモズの国内の繁殖分布域は、長野県と北海道に限られ、過去100年間で90.9%縮小したという研究成果が発表された。また、国内における現在の繁殖つがい数は149つがい、個体数は332個体と推定されている。(Kitazawa et al.2020)
- ・勇払原野では定期的に2つがいが確認されており、この研究結果を受けて現在利用されている繁殖地であるこの地域を保全することは、これまで考えられていたよりもさらに重要度が高いことが明らかとなった。今後も関係機関と連携し、繁殖地を脅かすことなく、工事を進めていくことが重要である。



●チュウヒ(タカ目タカ科 全長:オス48cm、メス58cm)

- ・主に、北日本の草原、湖沼や河川敷周辺の湿原のヨシ原などで繁殖し、本州中部以南で越冬する。国内繁殖数は136つがいのみ、国内最少のタカ科鳥類である。(当会まとめ)
- ・2017年に、種の保存法に基づき「国内希少野生動植物種」に指定され、保護される対象種となった。
- ・勇払原野では、20つがいが繁殖、その内苫小牧東部開発地域では、2000年代以降6つがい前後が繁殖していると推定され、勇払原野は国内ではサロベツ原野に次いで重要な繁殖地と考えられる。



絶滅危惧Ⅱ類

●タンチョウ(ツル目ツル科 全長:140cm)

- ・主に北海道東部の湿原で繁殖し、冬は鶴居村などの給餌場に集まる。
- ・一時は絶滅したと考えられたが、1924年の再発見以来、地元の方々の保護活動が奏功し、現在は約1800羽まで回復している。
- ・1993年に「国内希少野生動植物種」に指定され、保護増殖事業が進められている。
- ・個体数の回復に伴い、近年はサロベツ原野やむかわ町などで繁殖するなど、分布域も拡大しつつある。
- ・ウトナイ湖では2020年5月に、ヒナ1羽を含む3羽の親子が確認された。近い将来、苫東地域で繁殖する可能性は高く、同地域は北海道西部における個体数や分布域分散の基盤となる可能性がある。



●オジロワシ(タカ目タカ科 全長:オス84cm、メス94cm)

- ・北海道の北部や東部などで少数が繁殖するが、多くは冬鳥としてユーラシア大陸東部より渡来し、海岸、河口、湖沼に生息する。
- ・1993年に「国内希少野生動植物種」に指定されている。
- ・近年、苫小牧地方でも周年観察されるようになり、勇払原野で繁殖が確認されている。



オジロワシ 写真/新谷幸嗣

準絶滅危惧

●マキノセンニュウ(スズメ目センニュウ科 全長12cm)

- ・夏鳥として北海道の海岸草原、湿原、牧草地で繁殖する。越冬地は東南アジア。
- ・2012年8月の環境省第4次レッドリストで新たに掲載された。
- ・繁殖環境である低茎湿生草原が減少するなか、苫東地域は道内でも特筆すべき生息密度であると推察される。



●オオジシギ(チドリ目シギ科 全長31cm)

- ・北海道の草原では夏鳥として普通に繁殖するが、国内でも世界的にも分布が局所的で個体数が少ない。越冬地はオーストラリア。
- ・繁殖期における勇払原野での個体数調査では、2001年には107羽が確認されたが、2017年の調査では77羽となり、約3割減少していた。さらに2019年には、個体数が63羽とさらなる減少を確認した。
- ・2020年に道内5地域で実施した個体数調査の結果、推定個体数は2万羽程度で、2018年と比べると約42%減少した。減少の原因は、越冬地であるオーストラリアの異常気象(高温・乾燥)が影響をもたらしたと考えている。(当会調べ)
- ・苫小牧市内の弁天沼では、2001年8月に標識調査によって合計400羽以上が確認されており、長距離飛行のエネルギーを蓄積する中継地として、秋の渡りの前に集結することが知られている。2016年の衛星追跡調査では、苫東地域を出発後1週間でニューギニア島まで渡ったことが初めて確認された。
- ・今年も7月に勇払原野にて衛星追跡調査を実施し、越冬地であるオーストラリア大陸まで約9,000kmの追跡に成功し、現在も継続中である。



■写真提供

シマクイナ/宮 彰男 オジロワシ/新谷幸嗣

アカモズ・チュウヒ・タンチョウ・マキノセンニユウ・オオジシギ／(公財)日本野鳥の会

* 写真の無断転載禁。使用については必ずご相談ください。画像のデジタルデータで提供が可能です。

■参考

○絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)

※種の保存法の概要(環境省HP:<https://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/hozonho.html>)

○環境省レッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)

カテゴリー(ランク)の概要 ※環境省HP より

- ・絶滅危惧ⅠB類(EN):近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
- ・絶滅危惧Ⅱ類(VU):絶滅の危険が増大している種
- ・準絶滅危惧(NT):現時点での絶滅の危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

○日本鳥類目録 改訂第7版

日本野鳥の会の苫東地域での自然環境保全活動

勇払原野は北海道三大原野のひとつとして、釧路湿原、サロベツ原野と並び数えられています。原野を構成する湿原の面積は過去90年で約8分の1となり、著しく減少しているものの、残された自然環境は、ラムサール条約湿地であるウトナイ湖を含み、水鳥、草原性鳥類、絶滅のおそれのある鳥類の生息地として重要な役割を果たしています。一方、同所では1960年代の高度成長期に、第三次全国総合開発計画の一環として苫小牧東部開発計画がスタートしました。しかし、その後の社会情勢の変化により、当初計画の約1万700haの土地の多くが未利用地域として残され、また農地として開拓された場所が放置され原野化し、結果として鳥類の良好な生息地となっています。

当会はこの優れた鳥類の生息環境を将来にわたって維持していくために、2000年度から当該地域において鳥類調査を実施し、その生息状況から生息環境としての特徴を把握し、社会環境を考察して保全構想をまとめ、2006年に「ウトナイ湖・勇払原野保全構想報告書」を発行しました。以来、希少種の調査や弁天沼周辺での自然観察会を通じ、同所一帯の保全活動を行っています。近年の主な活動は以下の通りです。

- ・2006年 苫東地域におけるアカモズ生息状況調査を実施し、同地域がアカモズの国内有数の繁殖地である可能性が明らかになった。
- ・2006年 弁天沼周辺の畑等の土地利用の変化が鳥類相に与える影響調査を実施し、同所における耕作地化は、草原性鳥類の繁殖を阻害し個体数を減少させ、一帯の鳥類相をも変化させる可能性があることが明らかになった。
- ・2006年～ 弁天沼周辺での自然観察会を毎年実施。
- ・2007年～ 苫東地域におけるシマアオジの生息状況調査を毎年実施し、道内各地の生息記録が途絶えるなか、同地域には継続して渡来していたことが明らかになった。しかし、2012年の1羽を最後に、それ以降確認されていない。
- ・2008年 北海道知事宛てに「弁天沼周辺の土地利用に関する要望書」を提出。
- ・2009年 勇払原野で衛星電波発信機によるチュウヒの行動圏追跡調査を実施し、同種の繁殖期の行動範囲や生息に重要な環境が明らかになった。
- ・2012年 日本野鳥の会3支部との連名で、北海道知事宛てに「苫小牧東部開発地域内の鳥獣保護区指定に関する要望書」を提出。
繁殖期における希少鳥類の生息状況調査を毎年実施。結果を記者発表。
- ・2014年 弁天沼周辺約950ヘクタールが河道内調整地となることが決定。
- ・2016年 弁天沼で行った調査でオオジシギの渡りルートの一部を解明。
ウトナイ湖サンクチュアリ35周年記念シンポジウム～勇払原野をラムサール条約湿地に～を開催。
- ・2017年 勇払原野でオオジシギ個体数調査を実施。2001年と比較し、個体数が約3割減少。開発と樹林が減少要因だった。
- ・2019年 柳生博と学ぶ勇払原野の魅力～安平川河道内調整地の賢明な利用を考える～を開催。
- ・2020年 オオジシギの個体数調査を実施し、数の減少とオーストラリアでの異常気象の影響について推察した。
- ・2021年 ウトナイ湖サンクチュアリ開設40周年、ウトナイ湖のラムサール条約湿地登録30周年。11月に勇払原野の保全に関するシンポジウムを苫小牧市と開催予定である。
勇払原野で行なったオオジシギの衛星追跡調査では、越冬地であるオーストラリアまで約9,000kmの追跡に初めて成功した。